

昭和戦前・戦時釧路炭田における朝鮮人労働 ～雄別炭砒を中心に～

藤田 龍星*

Korean Labor in the Kushiro Coalfield before and during the Showa WW II
With a focus on the Yūbetsu Coal Mine

Ryusei FUJITA*

Summary

This report examines the actual number of Korean workers and labor management at Kushiro Coal Field Yūbetsu Coal Mine before and during Showa WWII.

The historical documents confirm that Yūbetsu Coal Mine employs a larger percentage of Korean workers than other Hokkaido coal mines due to its geographic remoteness, and the labor management measures that are unique to this mine.

初めに

釧路炭田の炭砒における昭和戦前・戦時の朝鮮人労働に関する研究は、九州筑豊炭田や北海道石狩炭田に比べて十分に進んでいないのが現状である。

佐川享平は『筑豊の朝鮮人鉱夫一九一〇～三〇年代労働・生活・社会とその管理』¹で主に戦間期の筑豊炭田の朝鮮人労働を取り上げ、社会的役割と戦時動員への接続を明らかにした。ここで佐川は、雄別炭砒と筑豊飯塚炭砒を例に挙げ、1930年代の三菱鉱業の人員整理の過程について論じている。この研究は、戦間期の雄別炭砒の朝鮮人労働者の状況を理解する上で貴重な研究である。しかし、筑豊炭田が研究のメインということもあり、釧路炭田に関する記述は一部にとどまっている。

戦時釧路炭田の朝鮮人労働に関する研究は、朝鮮人強制連行実態調査報告書編集委員会・札幌学院大学北海道委託調査報告書編集室がまとめた『北海道と朝鮮人労働者：朝鮮人強制連行実態調査報告書』²が挙げられる。この報告書では、戦時北海道の朝鮮人労働者の実態に関連して、炭砒や金鉱山、土建事業、工場などさまざまな労働現場に言及している。しかし、ここでは釧路炭田についての記述はあるものの、この報告全体の焦点が道内炭砒全体にあったため、釧路炭田の朝鮮人労働者の具体的な状況については詳細に言及されていない。

本研究が取り上げる雄別炭砒については、阿寒町史編纂委員会編『阿寒町史』³にその沿革が記されている。その中で、朝鮮人労働者に関しては「開坑以来相当数が入っている」⁴と記載されているものの、戦時中の朝鮮人労働者の人数や状況については「正確な数は明らかでないが、全鉱員の約六割が朝鮮人であった」⁵とのみ記されている。このように、雄別炭砒における朝鮮人労働者の実態については多くの不明な点が存在す

る。また、先述した佐川の研究においても、「雄別炭砒における朝鮮人鉱夫の使用開始時期や人数の推移については不明である」⁶とされているように、雄別炭砒における朝鮮人労働の詳細は未解明のままである。

そこで本研究では、さまざまな史料を用いて、戦前から戦時にかけての雄別炭砒における朝鮮人労働者の実数や労働環境、雄別炭砒の抱えた地理的な背景を考察していきたい。

第1章 地理的要因

雄別炭砒が位置する地形は舌辛川が流れる谷であり、周りには熊笹が鬱蒼と生い茂っている場所である。そもそも、この雄別という地名はアイヌ語で「ユクベツ」といい「鹿の多い沢」を意味しており⁷野生動物が多い場所であったことが分かる。例えば、1922年に雄別に来た住友トミは「来た頃は熊や狐が出そうで恐ろしかった」⁸さらに雄別に来た時の事を「まず大楽毛で一泊、翌日舌辛市街までは馬車軌道を利用し、そこから先は一列につないだ五、六頭の馬に荷物だけを積み、人は歩いて雄別まで行った」と語っていることから、雄別が山間の奥地であったことが窺える。このような山間の奥地では、炭砒住宅（以下炭住）や貯炭場を建設するスペースが乏しかった。これは、同じ釧路炭田にあった太平洋炭砒が平地に施設を建設することができた一方で、雄別炭砒は地理的に不利な条件を抱えていたということである。

交通に目を向けると、輸送地であり貯炭場でもある釧路港は、雄別炭砒から約40キロ離れており、附近に都市や主要な炭砒は存在せず労働者の移動は容易ではなかった。このような地理的条件は、炭砒が交通網によって、炭砒と主要都市、そして炭砒同士が接続する筑豊炭田や石狩炭田⁹には見られない条件である。

* 北海道大学大学院文學院 Graduate school of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University

このような遠隔地にあった雄別炭砒では、土地の狭小さがネックとなっており、1920年代後半より増産が図られたものの、炭住の新設は避けられた。そのため、家族持ちの日本人労働者を雇入れるのは困難とされ、単身の朝鮮人労働者が求められたのである。¹⁰そして、このような山間で他の都市や炭砒と離れている場所は、朝鮮人労働者の労務管理の面でも最適な場所であったとも言える。

また、釧路炭田はその開発時期においても筑豊炭田や石狩炭田と比べて差異があると言える。筑豊炭田は、明治初頭から近世から受け継いだ石炭産業の地盤が存在していた。石狩炭田では1880年代に幌内炭砒を中心に開発が進められ、その後、夕張炭砒をはじめとする有力炭砒が生まれた。一方、釧路炭田の本格的な開発は1900年代に入ってからのものであった。この開発時期の遅れは、日本人労働者の確保が困難になった一因であったと考えられる。

第2章 戦前における朝鮮人労働者

1. 統計史料からみる戦前の朝鮮人労働者

統計史料から雄別炭砒の朝鮮人労働者の実数を把握してみよう。1924年における道内各炭砒の朝鮮人労働者は以下のようになっている。

表 1 1924 年道内炭砒朝鮮人労働者数

萬字炭砒	283名
新歌志内炭砒	4名
夕張炭砒	236名
奔別炭砒	1名
茂尻炭砒	7名
新夕張炭砒	44名
彌生炭砒	10名
幌内炭砒	16名
豊田炭砒	1名
眞谷地炭砒	2名
尺別炭砒	17名
美唄炭砒	185名
春採炭砒	12名
雄別炭砒	47名
別保炭砒	3名
三菱美流渡炭砒	4名
三井砂川炭砒	12名
歌志内炭砒	12名
若鍋炭砒	148名
計	1,039名

(出所：『本道炭山朝鮮人稼働状態(上) 札幌鑛務所調査』小樽新聞 大正13年8月22日)

この時点で最も多くの朝鮮人労働者を抱えているのは萬字炭砒(283名)で、次いで夕張炭砒(236名)と

なっている。雄別炭砒は47名と萬字・夕張・美唄炭砒といった石狩炭田の主要炭砒に比べるとその数は劣っている。この時期の雄別炭砒は1919年に開坑したばかりの新炭砒であり、炭砒の規模もまだ小さかった。しかし、かねてから稼働しており、雄別炭砒より規模が大きかった釧路炭田の別保(3名)・春採(12名)炭砒より朝鮮人労働者の数が多いことが窺える。

1928年6月末現在の全道の炭砒における朝鮮人労働者について以下のようなデータがある。

表 2 1928 年道内炭砒朝鮮人労働者数

炭砒名	男性	女性	計
夕張炭砒	693人	0人	693人
新夕張炭砒	157人	0人	157人
若菜辺炭砒	252人	0人	252人
登川炭砒	27人	0人	27人
上砂川三井炭砒	32人	0人	32人
大倉茂尻炭砒	20人	0人	20人
万字炭砒	236人	5人	241人
三菱美唄炭砒	677人	0人	677人
美流渡炭砒	71人	9人	80人
雄別炭砒	573人	1人	574人
尺別炭砒	103人	0人	103人
別保炭砒	12人	0人	12人
春採炭砒	25人	0人	25人

(出所：「特思秘第二六〇二號 昭和三年八月十三日(半年報) 朝鮮人統計表」北海道廳編)

この表で、雄別炭砒は三菱美唄炭砒・夕張炭砒に次ぐ574人の朝鮮人労働者を抱えている。その数は、1924年の47名から4年間で約14倍にまで増加しており、表中の炭砒の中では増加率1位となっている。

表3は1931年雄別炭砒の鉱員の出身地別表(8月5日調査)である。

表 3 雄別炭砒労働者出身地別表

朝鮮	294名	56%
北海道	93名	18%
東北地方	127名	20%
九州地方	6名	1%
その他各地方	26名	5%
計	526名	100%

(出所：山本栄一『雄別炭坑報告/August,1931』79頁(資料番号：鉱山報文/0079) 北海道大学文書館蔵)

1931年には鉱員の過半数が朝鮮人労働者であった。1925年と比べると、その数は573人から279人の減少が見られる。この理由としては昭和恐慌への対応として1930年に数回行われた人員整理の影響であると考えられる。

さて、雄別炭砒の朝鮮人労働者はいかなる特性を持っていたのであろうか。朝鮮人労働者294名の前職に関する表を見てみよう。

表 4 雄別炭砒朝鮮人労働者の前職について

	朝鮮人
炭砒関係	47名
炭砒関係以外	247名 (内農業従事者184名)

(出所：山本前掲,80頁)

この表4を見るに、84%の朝鮮人労働者は前職炭砒と無関係な職に就いていることが分かる。前職が炭砒関係以外の247名の内184名が元農業従事者であり、割合にして75%を占めている。

次に朝鮮人労働者の学歴を見ていく。

表 5 雄別炭砒労働者学歴表

		日本人	朝鮮人
中等学校	卒業	1名	—
	中退	5名	—
尋常高等小学校	卒業	53名	—
	中退	6名	—
尋常	卒業	86名	7名
小学校	中退	65名	17名
就学経験なし		11名	267名

(出所：山本前掲,81頁)

表5からは、日本人と朝鮮人の労働者間の就学経験の差異が見て取れ、日本人労働者に比べて朝鮮人労働者の就学経験の乏しさが目立つ。朝鮮人労働者の中で中等学校、尋常高等小学校を卒業した者はおらず、尋常小学校卒業も7名、中退17名に留まっている。しかし、表5の就学経験はあくまで日本の教育機関による教育を受けた者であり、朝鮮人労働者たちの中で書堂に代表されるような朝鮮式の教育を受けていた者がいた可能性は否定できない。

最後に、雄別炭砒にきた朝鮮人労働者の家族について見てみよう。

表 6 雄別炭砒鉱員家族構成表

家族人数	日本人	朝鮮人
単身	89名	264名
2人	22名	16名
3人	33名	8名
4人	30名	5名
5人	24名	—
6人	11名	—
7人	13名	—
8人以上	6名	—
計	226名	294名

(出所：山本前掲,82頁)

表6を見るに朝鮮人労働者294名中の264名、割合にして78%が単身者であったことが分かる(この表には朝鮮人の合計値に1名分ずれがあるが、鉱山報文作成者の計算ミスと思われる)。

以上から、雄別炭砒の朝鮮人労働者の特徴は、「日本式の就学経験が乏しい単身の元農業従事者」であったことが指摘できる。

2.炭砒側の認識

統計史料から雄別炭砒は、戦前の道内他炭砒と比べて、多数の朝鮮人労働者を抱えていたことが確認できた。では、会社側朝鮮人労働者の多さをどのように認識していたのであろうか。

1929年の『北海道石炭鑛業會會報』¹¹にて雄別炭砒緒方主任は「賃金は差別なく内地人と同様に割當をなし、優秀なる鑛夫は先山として良好なる成績を示す(中略)日鮮融和に付て特に留意」と語っている。ここから雄別炭砒では、朝鮮人であっても作業の指導的立場に立つ熟練鉱員である先山に成り得たことが分かる。また、朝鮮人労働者が約半数を占めていた雄別炭砒にとって「日鮮融和」は炭砒を稼働させるうえで欠かせないものであったと考えられる。

1940年の大阪朝日新聞記事に以下のような記事がある。

半島人勞務者の比率が最も高くしてしかも好成績を擧げている雄別炭山の小池所長が右の点に関して、内鮮人の比率は表面的な数の割合ではなく採炭の技術を習得したいはゆる先山になり得る人の比率問題に歸着する。僕は半島人勞務者も二年三年と定着しきへすれば必ず先山になり得るものが多いと確信する。従つて半島人勞務者にはいいリーダーをつけること、勞務管理、治安維持に有効な方法を探ることの二つが實現出来れば問題の中心は解決する。と樂觀的な見解を示してゐたことは注目された。¹²

この記事で雄別炭砒の小池鉱業所所長は、朝鮮人労働者であっても2~3年定着すれば先山になりうると話している。これは先述した1929年の『北海道石炭鑛業會會報』とほぼ同内容であり、朝鮮人先山に対する期待は11年後も受け継がれていたことが窺える。

3.道内他炭砒との待遇面での比較

ここでは「半島人勞務者ニ關スル調査報告」(1940年)を中心に、その他の史料を活用しながら、道内主要炭砒の朝鮮人労働者の待遇の検討を行っていく。

表 7 朝鮮人鉱員の給与関係
(小数以下点で四捨五入)

	1ヶ月 実取	1ヶ月食費	送金月額 (平均)	貯金月額 (平均)
歌志内 炭砒	84円	16円	3~80円	5~9円
空知炭砒	78円	14円	26円	15円
雄別炭砒	72円	15円	25円	19円
春採炭砒	99円	15円	20円	10円
北炭 夕張炭砒	69円	14円	23円	7円
三井 砂川炭砒	80円	14円	23円	20円

(出所:「半島人労務者ニ關スル調査報告」『日本鑛山資料』78輯,1940年)

給与関係の面では、雄別炭砒は表の中で貯金額が19円と三井砂川炭砒に次いで高くなっている。

また、本国への月額送金額は25円とされており、この点において雄別炭砒では「賃金の剰餘は必ず送金する事」¹³という方針がとれていた。そして、この送金方法は以下のような形式であった。¹⁴

其送金方法はまた内地人と異なり、爲替等には依らず必ず、現金を其儘送金するを特色とす、之れ國民性並に朝鮮内地の郵便局は多く彼等の部落より遠距離に存在するが故なるべし

このように送金は、現金をそのまま家族のもとへ送る形式で行われた。そうすることで、郵便局が遠い地方に住む家族が受け取りやすいというメリットがあったのである。

表 8 住居情報

	社宅	寮	寝具
歌志内炭砒	無料	16畳10名 12畳8名	各自購入
空知炭砒	無料	14畳9名	貸与 (1日5銭)
雄別炭砒	無料	記述無し	譲渡 (1日5銭)
春採炭砒	無料	10畳6名 21畳12名	不明
北炭夕張炭砒	無料	15畳10名	貸与(1日3銭)
三井砂川炭砒	無料	8畳5~9名	譲渡(毎月3円月賦)

(出所:前掲「半島人労務者ニ關スル調査報告」)

住居情報に関して上記の表8では、朝鮮人労働者用の寮は記述無しとあるが、この調査報告が作成された翌年の1941年の北海タイムスには「第一寮から五寮までの宿舎に六百餘名の報國隊¹⁵が起居」¹⁶とあり朝鮮人労働者用の寮が存在していたことが分かる。寮については『北海道鑛業會會報』(1941年)に「合宿は鮮人

の組長を有する鮮人のみのものと、内地人と雜居のものもあり」¹⁷とあり、朝鮮人労働者と日本人労働者が同じ寮に入居していた事例もある。社宅に関しては「社宅も特に内地人と交互に介在せしむ」とあり、社宅においても朝鮮人労働者と日本人労働者の居住区画は分かれていなかったことが窺える。このようなことから、雄別炭砒の朝鮮人労働者は、朝鮮人のみの寮に関しては不明だが、日本人労働者と同じ寮や社宅に住む場合は、日本人労働者と遜色ない住環境にあったと言える。

表 9 食事関係

	食事	食費(日)
歌志内炭砒	朝一汁 昼弁当(漬物か小魚)	52銭
空知炭砒	日本人と同じ 1日7合、一味追加	75銭
雄別炭砒	朝鮮式料理	55銭
春採炭砒	朝鮮人賄人による調理	69銭
北炭夕張炭砒	日本人と同じ、一味追加	65銭
三井砂川炭砒	日本人と同じ	45銭

(出所:前掲「半島人労務者ニ關スル調査報告」)

食事の面では雄別炭砒、春採炭砒と釧路炭田の2鉱が朝鮮料理を提供しており、日本人労働者と朝鮮人労働者の間で食事内容を変えていたことが窺える。

第3章 戦時朝鮮人労働

1. 戦時朝鮮人労働の様相

1941年以降、全国の炭砒の日本人の労働者は応召によって戦地へと向かい、労働者不足に拍車がかかった。この応召によって空いた労働力の穴を朝鮮人労働者や勤労報國隊で賄う必要があった。

その解決策の一つとして1942年2月に「朝鮮人労務者活用ニ關スル方策」が閣議決定され、朝鮮総督府の「朝鮮人内地移入斡旋要項」によって、斡旋による朝鮮人労務者の移入が始まった。全道の炭砒の労働者は表10に見られるように戦前よりも増えている。

表 10 1943年5月末の調べ

(日本人短期労働者含む、割合は小数点以下四捨五入)

炭砒名	全体	朝鮮人	朝鮮人労働者が
	労働者数	労働者	占める割合
大夕張炭砒	3,309名	1,178名	36%
三菱美唄炭砒	6,683名	1,535名	23%
三井砂川炭砒	6,721名	1,633名	24%
雄別炭砒	2,352名	946名	40%
春採炭砒	2,410名	438名	18%
別保炭砒	1,406名	367名	26%

(出所:「県別炭砒労務者移動調」長澤秀『戦時下朝鮮人中国人連合軍捕虜強制連行資料集』1992年, 緑蔭書房, 94頁)

雄別炭砒の朝鮮人労働者の数は、1931年8月の294名(表8)から約4倍にまで飛躍的に増えている。朝鮮人労働者の割合においても雄別炭砒は、他の道内炭砒に比べ依然高いことが分かる。

企画院第二部の「北海道炭砒視察報告」(1942年)には以下のように記述されている。

半島人比率ハ遙カニ三〇%ヲ超過スヘシ就中釧路雄別炭砒ニ於テハ多数ノ半島人ヲ使役シテ良好ナ成績ヲ収メツツアリ坑内夫ノ半島人出稼比率ハ五六%ニ達ス¹⁸

ここから、雄別炭砒が朝鮮人労働者を用いて良好な成績を収めていることが確認できる。一方、この報告には朝鮮人労働者の多さによる治安悪化も懸念も示されている。

付和雷同性ニ富ム多数ノ半島人ヲ擁シテハ不断ニ大小ノ問題惹起ヲ免レズ、釧路警察当局ノ如キ雄別炭砒ニ對シテ治安上半島人坑夫ノ在籍半バヲ超過スルコトナキ様嚴重ナル要求ヲ爲シツツアリ¹⁹

この記述から釧路警察署は、雄別炭砒へ朝鮮人労働者数の是正を求めていたことがわかる。更に、当局はこの朝鮮人労働者の多さによる治安が悪化することを懸念していた。この治安悪化の懸念は、雄別炭砒のみならず、朝鮮人労働者を使役していた全国炭砒で見られた。

また、官斡旋によって受入れられた朝鮮人労働者の契約は2年間のみであった。そのため、労働力確保を至上命題とする炭砒側には、彼らとの再契約が課題として立ちふさがったのである。先述した「北海道炭砒視察報告」では「現行ノ制度ニ於テハ折角半島労務者ノ大量移入ヲ斷行シ乍ラ其稼働期間(二年間)ハ短キ」²⁰とあり、さらに「大半ヲ豫備訓練ト作業熟練トニ費シ眞ニ其能率ヲ最大ニ發揮シ石炭生産ニ寄與スベキ時期ニハ歸郷シテ新參者ト入換ルコトナル」²¹としている。

再契約を促し契約した朝鮮人労働者を表彰した例が雄別炭砒をはじめとする各炭砒で見られた。以下は1943年6月18日の北海道新聞の記事である。

石炭増産に挺身する半島採炭戦士は朝鮮総督府の斡旋により二ヶ年の契約期限で釧路炭田の各坑に數年前より多數入山し日夜交代で地底に涙ぐましい敢闘を續け採炭能率の増強に多大の貢献を齎らし

てゐるが、近年來之等戦士が現地に於て再契約をなし最初の二ヶ年間に習得した技術を活かして生産戦の中核體となり他に垂範する状態で各炭砒では協和事業の促進と生産増強達成の建前から今回記念品を贈呈して再契約者全員を表彰す(中略) △雄別坑四三 △尺別坑六〇 △庶路坑一〇五 △春採坑二二 △別保坑六四²²

また、戦時の雄別炭砒には特徴的な朝鮮人労働者の存在があった。以下は1943年の『樺太鑛業』からの引用である。

雄別=日本唯一の半島人炭砒技師釧路雄別炭砒羅相薫氏(47)に半島増炭戦士初の功勞顯功章が輝いた、しかも釧路炭田最初の殊勲甲であり羅技師こそは半島の誇る鶴嘴戦士であり生産増強の精銳として顯彰されるに十分である羅技師の雄別炭砒における勤續ば(原文ママ)16年となる(中略)少年の頃より鑛鑛山の興味を抱き半島青年としては凡そ型破りの早稲田工手學校採鑛科を卒業してゐる²³

この史料から朝鮮人の技師(=職員)がいたことが確認され、その存在が史料曰く「日本唯一」とされている。実際「日本唯一」であるかは疑わしいが管見の限りでは、他の史料において北海道で朝鮮人職員の存在は確認できない。更に、この人物は早稲田工手學校を卒業しており、前述の朝鮮人労働者の特徴に当てはまらない存在であったことが分かる。

以下の史料では朝鮮人女性の存在も確認できる。

雄別鑛業所勞務課長の谷本得正氏が半島人勞務者の指導員として完山良子さんは來山早々半島同朋の合宿である至誠寮や、古くから定着してゐる半島鑛長の社宅を巡つて保健衛生上の万般について指導を開始した(中略) 谷本勞務課長談 完山さんが來てから半島鑛兵が生れ變りました、今日では慈母の如く慕はれてゐますし、衛生問題なども目に見えて向上して來ました、婦人指導員を置いてゐるのは全國でもうちの山だけですが、教化事業の新たなる指針として全國におすすめしたい²⁴

以上のように、朝鮮人女性の生活指導員を用いるのは他の炭砒では見られない方策であり、朝鮮人労働者割合が高い雄別炭砒ならではの朝鮮人勞務管理策ということができる。

2. 戦時朝鮮人労働者への待遇

全国の炭砒では労働者の給与の一部を貯金させる

ことが見られたが、この貯金に関して雄別炭砦では他炭砦と違う手法を用いていたことが以下の新聞記事から見て取れる。

池上労務主任の辨（中略）彼等は民族的に抑壓されることを嫌ふ性質がある。特に金銭の上にはよく現れる。貯金させるにしても頭から天引きすると不安を覚えるらしい。一旦手渡してその中から貯金させる。それでも安心出来ぬと見えて一度、二度は拂戻しをして見る²⁵

他の炭砦とは違い給料からの天引きをせず、さらに貯金したものの払戻しを行うなどして朝鮮人労働者の信頼を得ようとしていた。

また、この記事では続けて「この山では『半島人』と云ふ語を禁じ宿舎の名をとって『至誠寮人』と呼ばれてゐる」²⁶とあり、炭砦側が朝鮮人労働者への呼称に気を遣っていたことが窺える。

第4章 急速転換と朝鮮人労働者

1. 戦時釧路炭田の石炭輸送の問題点

出炭した石炭を船舶での輸送に頼っていた道内各炭砦において、戦時の船舶徴用は、石炭輸送を大きく滞らせる要因となった。釧路港においても例外ではなく以下のように増加する一方であった。

表 11 釧路港貯炭状況

	貯炭量 (t)	内地非常
		貯炭量 (t)
昭和16年11月	50,000	—
12月	77,000	—
2017年1月	78,000	—
2月	109,000	4,335
3月	112,000	24,600
4月	106,000	31,530
5月	136,000	48,053
6月	160,000	60,998
7月	163,800	82,034

（出所：「釧路港ニ於ル石炭積出ノ近状」『柏原兵太郎文書』（資料番号：125） 国会図書館蔵）

雄別炭砦は第一章で述べた通り、その地形上山元での貯炭量に限りがあった。そのため、産出した石炭は釧路港の貯炭場へ送られた。しかし、船舶不足の影響により釧路港の貯炭場の貯炭量は年々増加していきることがわかる。その対策として、小型船舶や機帆船による輸送を実施するも、貯炭量解消には至らなかった。この状況を見た企画院嘱託三原二郎は以下のように報告した。²⁷

序上ノ如キ状況アルニ鑑ミ雄別系各炭砦ハ今後配給ノ増加無キ限り或程度ノ減産ハ不可避ノ形成ニアリ。就中雄別本坑ハ本邦一般炭砦ガ生産能率生産トモニ漸減シテ不振ナルニアツテ獨リヨク能率ヲ維持シ増産ノ實ヲ挙ゲ出炭力旺盛将来性ニ富ム炭砦ナルニ出炭ノ制限ヲ行フ止ムナキハアルハ遺憾ナリ

として、「配給ノ増加」がないと雄別系の各砦は「減産ハ不可避」としている。また、「北海道炭礦視察報告」（1942年8月）にも「一般炭砦ニ於テハ配給不足ニヨリ貯炭各所ニ増嵩シ殊ニ釧路方面炭砦ニ於テハ生産ニ特ニ悪影響ヲ來シツツアリ」²⁸とあり貯炭場に石炭が集積し生産にも悪影響を与えていたことが窺える。

2. 閣議決定と実施

石炭の海上輸送が困難化する中、内閣は1944年8月11日に「樺太及釧路ニ於ケル炭礦勤勞者資材等ノ急速轉換ノ件」²⁹（以下急速轉換）を決定した。内容は以下の通りである。

- 一、現下急迫セル内地石炭需給状況打開ノ一方策トシテ樺太及釧路ニ於ケル炭礦ノ徹底的整理ヲ斷行シ其ノ保有スル勤勞者、資材等ノ急速轉換ヲ實施ス
- 二、本件實施ノ爲ノ具體的事項ニ付テハ軍需大臣關係各官廳ト緊密ナル連絡ヲ保持シ遅クトモ九月末迄ニ之ヲ完了スル如ク措置ス

この決定の理由としては「海上輸送力ノ逼迫ニ因リ樺太及北海道釧路地方ニ對スル配給ハ今後殆ンド之ヲ期待シ得ザル現状」のため「輸送力ノ裏付アル地方ノ炭礦ニ轉換」とある。

釧路炭田の各炭砦では以下の用に決定された。³⁰

廃止炭砦…白糠、休止炭砦…尺別、浦幌、本岐、別保、雄別（苔樋区域除く）、保坑炭砦…春採、庶路、雄別（苔樋区域）

釧路炭田の各砦からは、日本人3,000名、朝鮮人3,000名の計6,000名が轉換要員となった。このうち雄別炭砦は1,500名（内朝鮮人890名、全体の59%）が対象であった。

この轉換の方針が決定した1ヶ月前である7月の雄別炭砦における労働者の数は表12の通りである。

表 12 1944年7月雄別炭砦員数

朝鮮人	1,033名
日本人（学徒含む）	1,262名（学徒44名）
計	2,295名

(出所:「主要炭砒給源種別現在員表」『石炭統制会東部支部資料』(資料番号:69) 茨城県立歴史館蔵)

1,033名在籍した朝鮮人労働者の内の890名、割合にして86%の朝鮮人労働者が転換されることになった。一方、日本人労働者は在籍1218名中(学徒除く)610名が転換対象であり、割合は50%に留まった。表12は急速転換1ヶ月前のものであるから、そこから急速転換の実施まで数名の変動があるにせよ、概ね8割超の朝鮮人労働者が急速転換の対象になったことは確かである。

そして、1944年8月25日に急速転換第一陣として保・春採炭砒の人員合計820名が釧路を出発し、その2日後の27日に雄別炭砒の人員890名が釧路を出発した。ここで移送された人員は全て朝鮮人労働者であった。9月8日には残る雄別炭砒の人員610名が釧路を出発。この急速転換第六陣はすべて日本人職員・鉱員で構成されていた。

この急速転換では、太平洋炭砒=三井系、雄別炭砒=三菱系のように系列炭砒に人員が移送され、雄別炭砒の人員が向かったのは、三菱系列の鯉田・上山田・飯塚・勝田の4炭砒である。飯塚炭砒には、900名が転換され、そのうち朝鮮人は290名含まれていた。そして、鯉田・上山田・勝田炭砒には日本人職員・鉱員は転換されず、朝鮮人労働者のみが転換要員となった。

3. 転換後の雄別炭砒

急速転換後の雄別炭砒は、一部を除いて保坑指定だったため坑内の保安業務に人員が必要であったが、転換による人員の大幅減少で保安業務がままならない状況であった。そのため、雄別に在住していた女性たちが坑内の保安業務を行うことが見られた。彼女らは「保安婦」と呼ばれ20人~30人程度存在が確認される³¹。女性が坑内の保安作業を行うことは非常に珍しく当時の新聞でもこの女性たちの姿は新聞でも報道された。³²

急速転換が行われた翌月の1944年10月の石炭統制会の統計によると、雄別炭砒における朝鮮人労働者数は表13の通りである。

表 13 1944年10月雄別炭砒鉱員数

日本人	654名
朝鮮人	35名
合計	689名

(出所:「主要炭砒給源種別現在員表」『石炭統制会東部支部資料』(資料番号:69) 茨城県立歴史館蔵)

朝鮮人労働者の数が表12の1,033名から35名となり、998名の減員が見られる。ここから雄別炭砒に在籍していたほとんどの朝鮮人労働者が急速転換に動員されたことが読み取れる。また、11月・12月においても朝鮮人労働者の数は減少しており、12月の段階では朝鮮人労働者の数は僅か10名となっている。急速転換以降に雄別炭砒の朝鮮人労働者は増えておらず、年内に朝鮮人労働者を補充した形跡は見られない。

終わりに

本稿では、雄別炭砒における昭和戦前・戦時の朝鮮人労働者の実態に焦点を当て、その実数や労働環境を解明することを目的とした。これまでの研究では、雄別炭砒における朝鮮人労働者の人数や状況については十分に解明されておらず、雄別炭砒がなぜ多くの朝鮮人労働者を必要としたのか、また彼らがどのように働き、どのような生活を送ったのかという点が明白にされていなかった。

本研究では、雄別炭砒の地理的条件が朝鮮人労働者を集める一因となったことが明らかになった。雄別炭砒は阿寒の山奥にあり、炭砒施設を設置する土地が限られていたため、日本人労働者を雇うのが困難であった。このような条件下で、単身の労働者が求められ、それが朝鮮からの労働力が多くを占める原因になったのである。さらに、雄別炭砒の地理的条件は朝鮮人労働者の労働者の管理に適していたのである。

また、史料から特に1920年代にかけて朝鮮人労働者が急増したことが確認された。1931年の時点では雄別炭砒の労働者の半数以上が朝鮮人であり、その労働力は炭砒の操業に欠かせない存在となっていたのである。ここでの多くの朝鮮人労働者たちは、前職農業に従事していた者であり、炭砒での経験が少なかったが、時間を経る中で、その中から先山として活躍することもあった。このことは、炭砒側が彼らを労働力の重要な一翼として捉えていたことを示している。

そして、大戦後期の急速転換において、雄別炭砒の大多数の朝鮮人労働者は転換対象となり九州筑豊炭田に移送され、雄別炭砒はこの政策で「保坑」となった。労働の主力たる朝鮮人労働者を失った雄別炭砒は、その後、女性の手を借りねば坑内の保安も間に合わないほどの深刻な労働力不足に陥ったのであった。

以上の事から、雄別炭砒は開坑以来、朝鮮人労働者を労働の主力としてきており、朝鮮人労働者無くしては操業しえない炭砒であったということが明らかになった。

今後の課題としては、さらなる史料や統計を用いて雄別炭砒の朝鮮人労働者の推移を詳しく追っていきたいと考えている。また、筑豊炭田・石狩炭田などの炭砒とも比較し検討を進めていきたい。

参考文献

- ・石川孝織、佐藤富喜雄、福本寛「釧路炭田における戦時下「急速転換」経験者の証言を中心に」『エネルギー史研究』27, 2012年
- ・釧路炭田研究会『釧路炭田』1974年, 釧路叢書14
- ・古川由美子「戦時中北海道石炭輸送」『エネルギー史研究』19, 2004年
- ・矢野牧夫『昭和十九年夏、樺太の炭砒閉山国家機密—全炭鉱夫を至急「内地」へ送れ—』2006年, 樺太の歴史を学ぶ会
- ・矢野牧夫、丹治輝一、桑原真人『石炭の語る日本の近代』1978年, そしえて

- ¹ 佐川享平『筑豊の朝鮮人鉱夫・一九一〇～三〇年代労働・生活・社会とその管理』世織書房, 2021年。
- ² 朝鮮人強制連行実態調査報告書編集委員会・札幌学院大学北海道委託調査報告書編集室『北海道と朝鮮人労働者 朝鮮人強制連行実態調査報告書』札幌学院大学大学生生活協同組合, 1999年。
- ³ 阿寒町史編纂委員会『阿寒町史』阿寒町, 1966年。
- ⁴ 同上, 465頁。
- ⁵ 同上, 491頁。
- ⁶ 佐川前掲, 169頁。
- ⁷ 阿寒町史編纂委員会前掲, 461頁。
- ⁸ 同上。
- ⁹ ここでの石狩炭田は空知炭田と夕張炭田を合わせたものを指す。
- ¹⁰ 佐川前掲, 170頁。
- ¹¹ 茂呂泰晴「釧路地方の炭礦(上)」北海道石炭鑛業會『北海道石炭鑛業會會報』176號, 1929年, 43頁。
- ¹² 「国防資源の開発を視る」『大阪朝日新聞』1940年8月11日。
- ¹³ 茂呂前掲, 43頁。
- ¹⁴ 同上。
- ¹⁵ ここでは朝鮮人労働者を指す—引用者注
- ¹⁶ 「皇國民の血は燃ゆ」『北海タイムス』1941年1月14日。
- ¹⁷ 茂呂前掲, 43頁。
- ¹⁸ 「北海道炭礦視察報告」長澤秀『戦時下朝鮮人中国人連合軍捕虜強制連行資料集』緑蔭書房, 1992年, 93頁。
- ¹⁹ 同上, 99頁。
- ²⁰ 同上。
- ²¹ 同上。
- ²² 「増炭へ眞摯敢闘」『北海道新聞』1943年6月18日。
- ²³ 樺太鑛業會『樺太鑛業』第14巻第2号, 1943年, 200頁。
- ²⁴ 「半島礦兵に注ぎ込む御民われの感激」『北海道新聞』1943年8月7日。
- ²⁵ 「皇國民の血は燃ゆ」『北海タイムス』1941年1月14日。
- ²⁶ 同上。
- ²⁷ 同上。
- ²⁸ 前掲「北海道炭礦視察報告」87頁。
- ²⁹ 閣議決定「樺太及釧路ニ於ケル炭礦勤勞者、資材等ノ急速轉換ノ件ヲ定ム」1944年, (資料番号: 類02878100) 国立公文書館蔵。
- ³⁰ 「樺太及釧路ニ於ケル炭礦勤勞者、資材等ノ急速轉換實施要綱」『戦時下朝鮮人中国人連合軍捕虜強制連行資料集』99頁。
- ³¹ 阿寒町史編纂委員会前掲, 494頁。
- ³² 「事務服捨て>欣然と坑内深く増産の腕」『北海道新聞』1945年4月7日。